

短 報

北海道植物分布ノート(2)* (佐藤 謙)

Ken SATO: Notes on Distribution of Some Hokkaido Plants (2)

希少種に関して、生育地の新しい情報が盗掘を推進してしまう例が多い。一方、その情報を知らせないでいると、その生育地が開発行為によって無意識のままに破壊されてしまう例も多い。筆者はこのわずかな期間にいずれの場合も経験した。したがって、希少種についての新しい情報を得た場合、その取扱いには悩み深いものがある。ここに、筆者が得た希少種の情報についてある程度産地を不明のままに報告するので、保護にのみ利用していただきたいと考える。報告する植物の証拠標本は、北海学園大学植物標本室に保存しておく。

カラフトダイオウ *Rumex gmelinii* Turcz. (証拠標本: K. Sato 930408, 930457-930465)
本種は、南千島、サハリン、オホーツク海沿岸、朝鮮北部、中国東北部に分布する東アジア要素である(清水 1982-1983. 原色新日本高山植物図鑑. 保育社; 大井 1975. 日本植物誌. 至文堂)。日本における本種の分布は北海道大雪山にのみ知られていたが、最近、釧路湿原に追加されている(西川・伊藤 1992. 伊藤編「釧路湿原の生物社会と合理的利用に関する調査報告書」45-157, 釧路)。植物写真家の梅沢 俊氏の情報に基づいて、筆者は、1993年9月12日に北海道土幌町十勝三股において本種を確認した。その生育地は流水沿いや沼の辺縁部であり、いずれも林道に接しているので早急な保護策が必要である。

カリバオウギ *Astragalus yamamotoi* Miyabe et Tatewaki (証拠標本: S. Umezawa 9301-9302; K. Sato & S. Umezawa 930698-930700) 本種は、北海道固有種として後志支庁(狩場山)にのみ知られ、レッドデータブック(我が国における保護上重要な植物種及び群落に関する研究委員会種分科会編 1989)では絶滅した可能性が指摘されていた。1993年7月5日、梅沢 俊氏が檜山支庁において本種の開花個体を採集し、筆者が同

年9月19日にその結実個体を採集した。これらの標本を原記載(Miyabe and Tatewaki, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 8 (4): 380-381, 1934)と照合すると、ほとんどの形質が一致した。ただし、小葉が3-5対、がくの長さ7mm、旗弁の長さ2.2mmとなる標本が含まれていた。この生育地はかなり小面積であるので、開発計画がある場合には緊急な対策が必要である。

バシクルモン *Apocynum venetum* L. var. *basikurumon* Hara (証拠標本: K. Sato & T. Sasaki 930334-930337) 本種は、北海道と本州北部の海岸に限られ、北海道では檜山、後志、石狩、網走の各支庁の海岸に点在することが知られている(遠山 1958. 北陸の植物 7: 92-93)。しかしながら、本種が生育する海岸断崖は、道路工事によって無意識のままに失われる所が多くなってしまった。札幌在住の佐藤捷彦氏の情報に基づいて、1993年8月20日、胆振支庁穂別町の鶴川河川敷において本種が確認された。同地のバシクルモンは、ほとんどの形質が大井(1975)における記述と一致したが、葉の最大値が長さ6cm、幅2cmに達する標本が含まれている。穂別町の生育地は、内陸であることと、上流から運ばれた蛇紋岩がかなり混在した河川敷であることによって特記される。ここの個体数は、北海道各地の海岸とは異なって、かなり多く、半ば雑草のようにススキやエゾヤマハギなどと混生している。しかし無意識のままに砂利採取が行われている所があり、河川改修が大いに危惧されるので、この特殊な生育地の保護策が必要である。

オオウサギギク *Arnica sachalinensis* (Regel) A. Gray (証拠標本: K. Sato & S. Umezawa 920345-920346) 本種は、サハリン、沿海州および日本に分布する東北アジア要素(清水 1982-1983)であり、日本では空知支庁(ピンネシリ)と宗谷支庁(礼文島)への隔離分布が知ら

れていた。この2ヶ所の生育地は、保護が不十分であり、レッドデータブックでは絶滅危惧種に挙げられている。1992年8月26日、空知支庁(天塩山地)において本種が新たに確認されたが、この生育地もかなり小面積であるので、細心な保護策が必要である。

ミヤマノギク *Erigeron miyabeanus* Tatew. et Kitamura (証拠標本: K. Sato & J. Samejima 770402-77043; K. Sato 850011-850015; K. Sato & S. Umezawa 930177) 本種は、北海道固有種として宗谷支庁の北見ポロヌプリに限られていた(Tatewaki 1933. 植物分類地理 2: 86-92)。筆者は、1977年8月1日十勝支庁(日高山地南部)に、1985年7月7日空知支庁(天塩山地)に、それぞれミヤマノギクの新産を確認している。これらの標本は、上記文献における原記載(Tatewaki and Kitamura, Acta Phytotax. Geobot. 2: 90, 1933)と照合すると、ほとんどの形質が一致した。しかしながら、十勝支庁の標本ではロゼット葉の幅が3cm、空知支庁の標本では花径が4cm、ロゼット葉の幅が2.5cmとなる大きな個体が含まれていた。本種の産地は北海道の3ヶ所に増えたことになるが、いずれの生育地も小面積であるので、本種の保護には細心の注意が必要である。

アポイアズマギク *Erigeron thunbergii* A. Gray var. *angustifolius* (Tatew.) Hara (証拠標本: K. Sato & J. Samejima 770401; K. Sato 930170-930171) 本種は、北海道のかんらん岩地(アポイ岳)と石灰岩地(峠山)に知られていた。た

だし、峠山産植物はミヤマアズマギクの品種キリギシアズマギクとして除く考えがある(Inagaki et al. 1971. 北海道教育大学紀要(2B) 21: (41)-(53))。一方、筆者はアポイアズマギクを1977年7月16日に十勝支庁(日高山地南部)で、1993年6月20日には鶴川上流でそれぞれ確認している。ただし、これらの標本は、ロゼット葉が線状篋形であることによって、ジョウシュウアズマギクに近い特徴を示している。しかし、これらは、冠毛の長さが3mm未満であることと、根葉、花茎およびその葉に毛が多いことによってアポイアズマギクに同定される。2ヶ所の生育地は、共に河川と未舗装の車道に介在しているので、道路拡幅などの影響によって破壊される危険性が高い。

クシロチドリ *Herminium monorchis* (Linn.) R. Br. (証拠標本: K. Sato et al. 880709-880711, 880860-880861; K. Sato 910055, 910245-910248, 920078) 本種は、朝鮮、北インド、シベリア、ヨーロッパに分布し、日本では北海道釧路の分布が知られている(大井 1975)。レッドデータブックでは本種が危急種に挙げられている。北海道では渡島大島にも本種の分布が報告されていたが(菅原 1958, 函館植物研究会)、その後の確認がなかった。筆者は、同島における1988年からの調査において本種の分布を確認している。渡島大島の生育地は、現在では本種の最大の生育地と考えられるので、厳重な保護が必要である。

(北海学園大学教養部)

*本誌 62: 63-64, 1987から続く。

ニュース

岩槻邦男氏にエジンバラ公賞

Dr. K. IWATSUKI Received the Duke of Edinburgh Prize

本誌編集委員岩槻邦男氏は、このたび1994年度日本学士院エジンバラ公賞を贈られた。

この賞は日本学士院賞と同等のもので、野生生物保護基金(WWF)総裁のエジンバラ公を記念し、自然保護と種の保全に関する優れた研究に対

して与えられる。同氏の「植物の多様性の解析およびその滅失に関する保全生物学的研究」が受賞の対象とされ、6月6日に受賞式がおこなわれた。植物分類学の研究がこのような方面から評価され、しかも本賞はこれが第一回であることを考えると